続・黎明館敷地内の記念碑等について

小薗一哉

黎明館敷地内に点在する記念碑等については、楠田靖夫「黎明館敷地内の記念碑等について―『黎明館敷地の歴史』の断片―」（『黎明館調査研究報告第一集』昭和六十二（一九八七）年三月）にくわしく紹介されている。

しかし、昭和五十八（一九八三）年十月の黎明館開館以来二十八年の歳月を経てその位置等が変わったり、新たに設置されたものもあることから、この稿では続編という形でそれらを紹介することにした。

取り上げるのは六箇所であるが、うち「二　七高ゆかりの竜舌蘭」と「三　七高生久遠の像」については、正編の増補である。

一　七高歌碑

「七高造士館跡の碑」と「七高生久遠の像」を挟むようにして二基の歌碑が平成二（一九九〇）年十月に設置された。北側、南側まったく同じ形で、高さ100cm×幅65～100cm×厚さ20cmの黒御影の石板を五枚ずらして立てた意匠である。北側の碑には大正五（一九一六）年第十五周年紀念全寮々歌「楠の葉末」が、南側の碑には大正四（一九一五）年第十四回紀念祭歌「北辰斜に」が、それぞれ一枚の石に一節ずつ刻まれている。

それぞれの碑の正面には銅板の碑文がおかれているが、北側は「歌碑建立の由来」、南側は「巻頭言」となっている。

「七高歌碑」

北側の歌碑
「楠の葉末」

南側の歌碑
「北辰斜に」
画面左下の
銅板に
「巻頭言」

① 北側の歌碑

大正五年第十五周年紀念全寮々歌

楠の葉末

小川森秀 作詞
梁田貞 作曲

一

楠の葉末のささやきに　南の國は秋たけぬ
古城につどう若人の　夕べ寂しき欄干に
しじまあやしき池水の　深き憂をかこつかな

二

涙にくるる宵々を　若き心はいためじと
なべて濁れる人の世に　わびしく立ちし旅衣
わかれわかれておのがじし　遠き闇路をふみ迷ふ

三

旅のをわりに光榮ありと　尊き暗示の星くづは
塵の此の世を嘲りつ　行手をたどる若人は
友の情の湧くといふ　泉汲までは何かせむ

四

運命を荷ふ小羊も　さめては如何に迷ふらん
いざくつろぎの團欒して　若き生命を高調せよ
君が情に比ぶれば　煙も薄し櫻島

五

そは永からぬ三年かし　さわれ床しき若人が
靈と靈との結びては　何時かは解けむ永久に
君な忘れそ楠蔭の　南の國の起き臥しを

② 南側の歌碑

大正四年第十四回紀念祭歌

北辰斜に

築田勝三郎 作詞
須川政太郎 作曲

一

北辰斜にさすところ　大瀛の水洋々乎
春花かをる神州の　正気はこもる白鶴城
芳英とはにくちせねば　歴史もふりぬ四百年

二

紫さむる黎明の　静けき波に星かぞへ
荒涼の気に咽ぶとき　微吟消えゆくさつまがた
不屈の色もおごそかに　東火をはく櫻島

三

悲歌に耳籍す人もなく　沈み濁れる末の世の
驂鸞の夢よそにして　疾風迅雨に色さびし
古城の風に嘯ける　健児七百意気高し

四

南の翼この郷に　三とせとどまる鵬の影
行途は萬里雲わきて　雄圖もゆる天つ日や
かどでの昔叫びにし　理想の空に長驅せん

五

あゝ若き日の光榮は　ことし十四の紀年祭
祝ふもうれし向上の　旅の衣に散りかゝる
樟の下露清らけく　けふ南明の秋にして

③ 北側の銅板

歌碑建立の由来

第七高等学校造士館は、明治三十四年（一九〇一年）十月二十五日、鶴丸城趾なるこの地に開校記念式典が挙行され、昭和二十五年（一九五〇年）三月三十一日、戦後の学制改革によって、その五十年にわたる光輝ある歴史の幕を閉じた。

全国各地から青雲の志を抱いてこの学窓に集い卒業した者、その数九千二百七十九名、いづれも人生の最も貴重な青春の日々を、この地で熱い友垣の中、勉学に、讀書に、思索に、はた又スポーツに限りなく燃焼させ、心高鳴れば期せずして、固く肩を組んで高誦するのが「北辰斜に」であり「楠の葉末」であった。

この二つの記念祭歌及び寮歌は、歌詞といい、作曲といい、いづれも心の琴線にふれる不朽の名歌であり、我々七高造士館に学んだ者にとっては、魂のふるさとの歌であるとともに、広く一般にも愛誦されていることは、我々の喜びにたえないところである。

今年開校九十年記念祭を迎えるに当り、この二つの歌碑を建立し、我々の若き日の熱き想いと、第七高等学校造士館の遺芳を永遠に伝えるものである。

平成二年十月二十五日

第七高等学校造士館開校九十年記念祭

名誉会長　西田俊吉
大会会長　鎌田要人
実行委員長　中馬辰猪

④ 南側の銅板

巻頭言

流星落ちて住む處　橄欖の實の熟るる郷
あくがれの南の國に　つどひにし三年の夢短しと
結びも終へぬこの幸を　或ひは饗宴の庭に
或ひは星夜の窓の下に　若い高らふ感情の旋律をもて
思ひのまゝに歌ひ給へ　歌は悲しき時の母ともなり
うれしき時の友ともなれば

註一　「北辰斜に」について

「北辰」とは北極星のことである。北極星は北に行くほど真上に輝く。

たとえば札幌では、北天の仰角約四十三度の方向に見えるためやや頭を上げて仰ぎ見ることになる一方、南の鹿児島では仰角約三十一度の低い位置に見る。つまり、歌詞の「北辰斜にさすところ」とは、北極星が斜めの方向に見える鹿児島のことを意味している。

平成二（一九九〇）年十月発行「七高校歌集」の「編集後記」や、平成三（一九九一）年十月発行「東京七高会会報」に掲載された「最後の校歌集発行覚え書　中馬辰猪」に、「北辰斜に」の作詞者、作詞年、歌詞をどう考証したかについての記述がある。歌碑もこの七高校歌集もいずれも開校九十年を記念して作られており、校歌集を発行するに当たって行われた考証は歌碑を作るに当たっての考証と同じである。

「覚え書」の方は長いので、ここでは「編集後記」の方を一部抜粋して転載し、考証の一端を紹介したい。

編集後記

七高最後の校歌集を発行するに当り、最も心を砕いたのは、我々の魂のふるさとともいう可き「北辰斜に」の正しい作詞者、作詞年、それに歌詞についてであった。

同窓会名簿大正四年工科のところに、生橋（簗田）勝三郎・石川とあるのみで、中退者の印が付いている。最近の調査により大正五年九月十日退学であることが判明した。学籍簿には大正五年一月生橋に改姓となっているが「北辰斜に」簗田勝三郎としてながく親しまれているし、作詞した大正四年十月は簗田姓であったから今回も簗田勝三郎を採ることにした。

制作年は大正三年となっている校歌集が多いが、安東謙治氏（大正六年・英法）の七高在校時の日記、大正四年十月二十二日のところに「北辰斜に」の発表練習会ありとして、歌詞の全文が克明に記されているし、また七高の公式行事年などから考えて、第十四回紀念祭は大正四年であることは疑いない事實であるから、大正四年第十四回紀念祭歌と記することにした。ちなみに当時は記念祭を紀念祭と表現していた。

次に歌詞についてである。歌詞は一定不変のものと思われがちであるが、「北辰斜に」は特に関心が深かったので、発行のたびに可成りの変化がみられる。現在手もとにある古いものとしては、安東日記と大正十五年、それに昭和三年発行の校歌集がある。そこで、この三つについて仔細に比較検討してみたところ、次表の六行のほかは、三つの歌詞は全く同じであることがわかった。

安東日記	大正十五年	昭和三年
春花かをる神州の	春花かをる神州の	春花かほる神洲の
微吟消えゆくさつまがた	微吟消えゆく薩摩潟	微吟消へゆく薩摩潟
行途は萬里雲わきて	行途は萬里雲わきて	行路は萬里雲わきて
ことし十四の紀念祭	ことし十四の紀念祭	ことし十四の記念祭
旅の衣に散りかゝる	旅の衣にちりかゝる	旅の衣にちりかかる
けふ南明の秋にして	けふ南明の秋にして	けふ南溟の秋にして

（中略）このいずれを採用す可きか、広く寮歌愛好同窓の意見を徴して検討を重ねたが、結局「安東日記」に因るのが最も妥当ではないかとの結論に達した次第である。（後略）

（「七高校歌集」『第七高等学校造士館同窓会編』平成二

（一九九〇）年十月）

この「編集後記」の記述を踏まえ②の歌碑「北辰斜に」をみてみると、確かに歌碑も安東謙治氏の日記を基に刻まれたことが分かる。

ただ、歌碑の第五節の中で「ことし十四の紀年祭」と刻まれている部分があるが、「紀年祭」ではなく「紀念祭」がよいのではないだろうか。

確かに「きねんさい」には、「紀念祭」、「記念祭」、「紀年祭」と異なる表記が存在してはいるが、右に転載した考証の流れからしても、ここの場合は「安東日記」の「紀念祭」を取るべきであろう。

註二　「巻頭言」について

七高寮生が「北辰斜に」を集団で気勢をあげて合唱する時、歌に先立ってリーダー一人が「巻頭言」を高らかに誦し、ただちに「いざや歌わんかな北辰斜、いざや舞わんかな北辰斜。アインス・ツヴァイ・ドライ」で歌に移ったという。（時代により言い方が異なる場合もある。）

巻頭言について中馬辰猪氏が東京七高会会報上で繰り返し考察されている。これらを要約すると次のとおりである。

・　はじめ七高校歌集の巻尾に載せられていた。

・　昭和六年の校歌集編集以来校歌集の巻頭におかれるようになった。

・　最初は校歌集全体に対する巻頭言であったが、その後「北辰斜に」と対をなすようになった。

・　巻頭言は大分県出身の小野宏氏（昭和三年文甲）が大正十五年頃に作詞したと断定できる。

・　大正九年南寮が開設されたとき当時東大に在学中の先輩が寄贈歌を届けているが、その第二節が巻頭言のルーツではないか。この寄贈歌の作者は林道夫氏が最有力の候補者である。

（中馬辰猪「巻頭言の作詞者　楷と竜舌蘭の里帰り　各地の『北辰斜に』」『東京七高会会報』昭和五十九（一九八四）年）

（中馬辰猪「最後の校歌集発行覚え書」『東京七高会会報』平成三（一九九一）年十月）

なお、東大から寄贈され巻頭言のルーツになったとみられる寮歌「平和の光」については、諏訪兼位氏が中馬氏の先の考察と自身の体験も踏まえ試論を発表されている。作詞者を中馬氏が挙げた人とは別の人物と推定しているので、この試論も要約して紹介しておく。

・　歌詞が大正八年の七高全寮寮歌「紫蘭の海に」と似ている。七高在学中の学生が「紫蘭の海に」と「平和の光」の二つの寮歌を作詞し、姓名を名乗らず「東大寄贈」という形で発表したのではないか。

・　大正八年にも大正九年にも七高に在学していた清水悦氏（大正十年三月理科卒業）がその作詞者ではないか。

・　昭和二十一年四月清水氏本人から巻頭言（要約者註　巻頭言のルーツの意か）は大正九年に自分が作詞したと聞いた。

（諏訪兼位「巻頭言『流星落ちて…』は何時、誰が作詞したか―試論―」『第七高等学校造士館開校百年記念誌』平成

十二（二〇〇〇）年十月）

註三　巻頭言の「橄欖」の木について

巻頭言に「橄欖の實の熟るる郷」と詠まれている「橄欖」の木とはどういう植物であろうか。辞書には、次のように記載されている。

かんらん【橄欖】

カンラン科の常緑喬木。熱帯原産。わが国では、鹿児島の南端に移植栽培。高さ約四〇メートル。葉は羽状複葉、革質。花は黄白色、三弁。楕円形の核果は食用、種子を橄仁といい、油を採る。ウオノホネヌキ。なお、オリーブを「橄欖」と訳すことがあるが、本来は全く別種。

（広辞苑）

一　橄欖科の常緑きょう木。熱帯地方に栽培。葉は羽状複葉で、小葉は長だ円状ひ針形。葉のつけねに総状花序をなして黄白色の小花を開き、だ円形の核果を結ぶ。漢方で、果実は魚毒を消す効ありという。はくらん。りょくらん。

二　キリスト教で、オリーブの称。果肉をしぼった油を儀式に用い、枝葉は平和の象徴、その緑色は力と繁栄の象徴とされる。

（辞　海）

巻頭言の作者あるいはそのルーツとされる寮歌「平和の光」の作者が「橄欖」をカンラン科の植物としてとらえていたのかあるいはオリーブ（モクセイ科）としてとらえていたのかは不明だが、七高関係者の多くはオリーブだと解釈していたようだ。

平成四（一九九二）年夏、七高グラウンド跡地に建つ県立図書館に「日本でここにしかない『欖の木』を見たい」との来訪者があった。図書館では「欖の木」とは七高の巻頭言にある「橄欖の木」のことを言っているのではないかと考え、七高跡である黎明館、図書館を探したが、橄欖の木は見つからなかった。

これをきっかけとして、橄欖の木を七高ゆかりのこの地に植えようと、黎明館にも諮り現物探しが始まった。その結果、平成五（一九九三）年四月頃中種子町役場職員から図書館が譲り受けたのはカンラン科のカンラン二本であった。図書館では七高ゆかりの地で育てようと、玄関で一般公開したのち前庭に定植したが、寒さにより枯れてしまったという。また当時の資料には図書館に寄贈されたうち一本は黎明館で育てるつもりだとの記述もあるが、その一本がその後どうなったか黎明館にも記録は残っていない。

（中馬辰猪「一高の『上村中将の歌』と『橄欖樹』」『東京七高会会報』平成元（一九八九）年十月）

（南日本新聞、讀賣新聞平成五（一九九三）年七月二十九日付け）

（松山良昭『東京七高会会報』平成五（一九九三）年十月）

ほか

二　七高ゆかりの竜舌蘭（りゅうぜつらん）

昭和五十八（一九八三）年十二月開館後間もない黎明館屋外展示場の園地内、城山に向かって左手隅に植樹された。その後周囲の木が成長して日当たりが悪くなったため、平成十四（二〇〇二）年三月、北門東側の植え込み内に移植され、翌年由来板も建てられた。

さらに天璋院（篤姫）像建立に際し、七高ゆかりの植物（楷の木と竜舌蘭）を同じ場所にまとめようということになり、平成二十二（二〇一〇）年十二月楷の木の南側に由来板とともに移した。

○　由来板

由　来

明治三十四（一九〇一）年から昭和二十四（一九四九）年までこの地にあった第七高等学校造士館（七高）の敷地に竜舌蘭が植えられていた。

竜舌蘭は七高寮歌にも歌われるなど、七高敷地内の草木の中でも七高生に愛されたものの一つである。

現在の竜舌蘭は、七高在校生が昭和八年に神戸に持ち帰った芽株が関東地区の七高卒業生有志の間で引き継がれ、育てられていたもので、昭和五十八（一九八三）年に寄贈されたものである。

（二〇〇三年春　記）

「七高ゆかりの竜舌蘭」

註一　七高ゆかりの植物について

「七高ゆかりの」と形容される植物には、「竜舌蘭」のほか、前述の「橄欖」や、「楷の木」などが挙げられる。

「楷の木」については、楠田靖夫「黎明館敷地内の記念碑等について―『黎明館敷地の歴史』の断片―」のほか、次の報告に詳しい。

・中馬辰猪「七高に植えられた楷樹―一名孔子の木―」『東京七高会会報』昭和五十八（一九八三）年

・中馬辰猪「巻頭言の作詞者　楷と竜舌蘭の里帰り　各地の『北辰斜に』」『東京七高会会報』昭和五十九（一九八四）年

・冨宿敏雄「黎明館にある『七高ゆかりの楷の木』」『黎明館調査研究報告第十六集』平成十五（二〇〇三）年三月

三　七高生久遠の像

第七高等学校造士館開校八十五周年を記念して、昭和六十（一九八五）年十月七高同窓会により建てられたものである。

像は、七高生三人が一人は腰をおろし、二人が並んで立つという姿をとっている。本体の最高部は二メートルある。

なお、久遠の像が建立されて二年後の昭和六十二（一九八七）年十月、像の向かって左側に鹿児島七高同窓会による記念碑文が設置されている。

①　台座の側面刻銘

七高生久遠の像
開校八十五年記念
昭和六十年十月二十五日
第七高等学校造士館
同窓会會長　　中村四郎書

制作者　西村祐一
　　松枝秀晴
　　中村茂幸
協　力　西川口美術研究所
　　所長　永松操
鋳　造　岡宮美術鋳造株式会社

「七高生久遠の像」

②　記念碑文

記念碑文

開校八十五年に際し、我々は魂のふるさと七高への追慕の情やみ難く、龍舌蘭の花影の跡なるこの地に、七高生久遠の像を建立した。

第七高等学校造士館は、明治三十四年（一九〇一年）に創立され、学制改革により昭和二十五年（一九五〇年）三月三十一日をもってその歴史を閉じた。

光芒わずか五十年ではあったが、全国各地から青雲の志を抱いて、この学窓に集い、卒業した者は、その数九千二百七十九名に及ぶ。

我々は、ここで東西古今の哲理、科学を学び、読書、思索に沈潜しスポーツに心身を鍛え、校庭の芝生に、あるいは寮の灯火のもとに熱き友情を培い、共に青春を語り、人生を論じ、理想の空に長駆すべく旅立って行ったのである。

その過ぎ去りし青春の日々へのつきせぬ追憶の結集がこの像であり、三体の像はそれぞれ知、情、意を象徴するものである。

昭和六十二年十月二十五日

鹿児島七高同窓会会長　鎌田　要人

他有志一同

註一　七高生久遠の像建立の経緯について

七高OB宮原正徳氏のエッセイ集の中に「七高生久遠の像」と題する一文がある。久遠の像建立の経緯を記したものである。主な部分を抜粋

して紹介する。

鹿児島七高会のメンバーのなかから、母校のあとである黎明館前庭に七高生の銅像をつくろうという話がでてきたのは、昭和五十二年、七高七十七周年記念祭を終わってからまもなくの事であった。

（中略）諸種の意見をもちより討論を重ねいろいろのプロセスはあったが、鹿大教授である上村、宇都の友人で鹿大教育学部のデザインの教授永松氏の兄上が、川口市で美術研究所をひらいておられ、そこにすぐれた芸大卒の若手作家が集まっていることがわかり、永松教授から相談をしていただき、心よくひきうけるというご了解を得た。

銅像は三人像にするか七高にあやかり七人にするかという議論もあったが、七人では煩雑にすぎるということで三人像にすることに決定し、永松教授にデザインをお願いし、日展特選作家になった西村祐一氏を主任制作者に、松枝秀晴（国分高卒）、中村茂幸、三氏のグループに依頼することになった。

（中略）制作者三人の方々は三十歳前後の新進の作家で、学生像をつくるのに最もふさわしい人たちであった。三人の方々も旧制高校の銅像をつくることを名誉とし、情熱をかたむけて制作された。

原型ができた段階で、最も同窓生の多い、東京七高会、近畿七高会、福岡七高会に相談し快諾を得た。そして制作も終わり、ついに昭和六十年十月二十五日、七高八十五年開校記念日に全国から多数の恩師、同窓生、ならびに盟友として第五高等学校の代表者の参加を得て、銅像の除幕式をめでたく挙行し、この像を「七高生久遠の像」と命名した。九十歳をすぎてなお元気な中村四郎同窓会長（大正七年英法卒）のあいさつ、鎌田要人鹿児島同窓会長の祭文、鳥集正教（昭和十四年文甲卒）の「のりと」をおごそかにきき、式をとじた。原田県議会議長、赤崎市長、鹿大石神学長（昭和十年文甲卒）の参加もあり除幕式に花をそえていただいた。（後略）

（宮原正徳「白鶴城の芝生」平成元〈一九八九〉年八月春苑堂書店）

なお、この文章は「第七高等学校造士館開校九十五年記念誌」（平成七〈一九九五〉年十月）にも転載されている。

四　御角櫓跡（おすみやぐらあと）

鹿児島（鶴丸）城跡石垣の修復工事に先立って平成十一（一九九九）年七月十九日から同年八月五日まで行われた埋蔵文化財の緊急発掘調査により、黎明館の南東部に溶結凝灰岩切石を敷き詰めた建物遺構が見つかった。建物の基礎となる敷石、犬走り、雨落溝などの構造から「御角櫓」の建物基礎の一部と判断された。

明治六（一八七三）年十月、鹿児島城本丸は不審火により焼失し、御角櫓も焼け落ちてしまっており、検出された建物遺構は、この焼失した御角櫓の建物基礎にあたる。

平成十二（二〇〇〇）年十一月から現地に保存展示し、同年十二月には屋外展示説明板も設置されている。

○ **屋外展示説明板**（註　原文横書きを縦書きに改めた。）

・御角櫓（屋蔵）跡

平成11（1999）年8月、石垣の補修事業に伴って実施された埋蔵文化財の発掘調査で、現地表面下約1㍍の地点で発見された櫓の基礎の一部分です。

「御角櫓」は本丸の南東角に位置し、城の防御とともに美観や威厳を保つ役目を持つ施設ですが、明治初期の資料では、「御角屋蔵」と表現され、物品収蔵施設としての用途もあったものと思われます。

元禄9（1696）年焼失し、幕府の許可を得て再建されましたが、明治6（1873）年の大火で再び焼失しました。

・御角櫓（○で囲まれた建物）と御楼門　明治初年の撮影

写真（省略）

・本丸間取図（部分）

明治6（1873）年、金山奉行等を勤めた成尾常矩が作成した本丸内間取図。原資料は、明治10（1877）年西南戦争で焼失。複製が鹿児島市立美術館に収蔵されている。

間取図（省略）

・御角櫓（屋蔵）基礎部分平面図

櫓の北西の一角が残存。本来の大きさは、奥行き約3間（5．4㍍）、巾12間（21．6㍍）。建物の壁は石垣の上に乗る。壁の立ち上がり部分を示す漆喰が確認できる。

平面図（省略）

註一　鶴丸城石垣補修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業について

肱岡孝夫・戸崎勝洋「鹿児島城御角櫓跡」『黎明館調査研究報告第十四集』平成十三（二〇〇一）年三月

註二　篤姫と御角櫓（御角蔵）について

尚古集成館所蔵の奥日記の一つ「表方御右筆間　日記」は藩主を中心に鹿児島城本丸の様子を記した、対象者の私的な側面（動静・贈答・冠婚葬祭等）を描いた公的な日記である。

その中に篤姫と御角櫓（日記では「御角蔵」と書かれている。）が出てくるので抜粋して紹介する。

十九歳の篤姫は江戸へ出府するまでの時期、嘉永六（一八五三）年六

月五日から八月二十一日までの間、鶴丸城本丸（現黎明館）で過ごしている。城内での様子が記されているが、抜粋は同年六月十五日に典姫（島津斉彬の実子で系図上は篤姫の妹にあたる。当時二歳。）とともに祇園祭を見物している部分である。

一今日祇園御祭り二付、
一御角蔵江
篤姫様
典姫様御覧二被為入候、

（崎山健文「史料紹介『嘉永六年　表方御右筆間　日記』（一）～篤姫養女一件寸考～」『黎明館調査研究報告第二十三集』平成二十二（二〇一〇）年九月）

「御角櫓跡」

五　聚珍寶庫碑（しゅうちんほうこひ）

黎明館正面玄関横の庭園内にある。

「聚珍寶庫碑」とは、薩摩藩主島津重豪が文政十（一八二七）年、江戸高輪の藩邸内に建立した「聚珍寶庫」（国内外の珍しいものを聚めた寶物庫）の由来等を記した石碑である。平成十二（二〇〇〇）年三月片岡勝太郎氏邸となっていた東京都大田区南雪谷の旧島津邸から黎明館に移し、同年十二月設置したものである。

石碑の大きさは高さ120cm×幅63cm×厚さ13．3cmで、移設にあたり新たに台座を設置し、説明板も作られた。

「聚珍寶庫碑」

①　石碑

聚　珍　寶　庫　碑

天地始闢焉日月初顯焉而化毓萬彙乃飛潛動植蕃衍矣於是乎炎皇嘗百草分良毒禹貢載著名物詩三百詠之於此興而后品物醫藥愈衆矣吾曾聚海内諸州之異品求海外殊方之珍奇栽培草木畜養鳥獸多欲識其真録諸紙上貯諸胸懐是詩書之餘興静中之一楽也歳月既積

寶貝玉石古印古瓦百般精工窯器奇物異産纂纂乎盈于楼中神丹霊
斎常収蓄於薬瓢不譲方今之醫流吾歴年之覃思後世若惜為烏有今
茲秋九月營一宇之寶庫于荏原郡蓬山別埜擇取其尤或排之於架上
或列之於筐中至夐古之品如瘞鶴之仆石如甘泉之遺瓦未嘗得之尚
且至如高辛氏之鐺燧人氏之鑽炎皇之琴大昊之瑟今雖未嘗能見之
玉石之寶色賸萬古之光耀窯器之畫彩存千秋之文章天下所有庶品
盡在一瞬之中豈其不愉快乎故以聚珍為庫號而已吾百年之後其守
之者勿散彙品勿毀寶庫宜存乎□□乃自繫文辭以樹苑中爾維時
文政十年丁亥歳冬十月也
□□□□□□　　於　城南荏原隠館時年八十有参

②　説明板

碑文のあらまし

天地がはじめて開け、太陽と月がこの世に現れて、動植物が世界に広がった。神農（中国伝説上の皇帝）が現れて、多くの植物を薬と毒に区別した。

私（島津重豪）は、これまで日本各地や海外の珍しい物産を収集し、草木を栽培し、鳥や動物を飼育したが、それは自然界の真理を知ろうとしたためである。

年月を重ねるうちに、屋敷の中に宝石、古代の印章や瓦、陶磁器などが満ちてきた。長年の心を込めた収集は、将来その散逸を残念に思う人がいるかもしれない。

そこで宝物庫を荏原郡の別荘（高輪藩邸内）に建て、収集品のうち特に優れたものを選んで収めた。そして、宝物庫の名前を「聚珍」とした。

百年の後にこの収集品を所有するものは、どうか散逸させることなく、永遠に保持してほしい。

③　移設の経緯（碑の台座にはめ込んである銅板）

「聚珍寶庫碑」は、島津重豪が文政十（一八二七）年に江戸高輪の藩邸内に建てた「聚珍寶庫」（珍しいものを聚めた宝物庫）の由来等を記した石碑である。

重豪は国内外の珍しい物産を収集し、また草木の栽培や鳥獣の飼育を行い、これらを研究・記録することによって、自然界の真理を解明しようとした。これは、現代の博物館における資料の収集・調査研究活動に通ずるものである。

関係者のご協力により、平成十二年、東京都大田区南雪谷の旧島津邸（現在、片岡勝太郎氏邸）から黎明館に移設した。

註一　「聚珍寶庫碑」について

吉満庄司「（資料紹介）『聚珍寶庫碑』について」『黎明館調査研究報告第十三集』平成十二（二〇〇〇）年三月

①に掲げた石碑の漢字の字体についても、この報告書を参照した。

註二　石碑の欠損部分について

この石碑には欠損部分（①の石碑の中の□の部分）が二箇所ある。曾槃（そうはん）著「仰望節録（ぎょうぼうせつろく）」（玉里島津家資料）によると最後の行の判読不明な個所は「源重豪榮翁撰」で、後ろから三行目は「永世」であることが確認できる。また六行目の「後世若惜」は「仰望節録」では「惜後世若」となっている。（吉満氏前掲報告書参照）

なお、「仰望節録」は侍医の曾槃が重豪の米寿の年その業績をたたえ記したものである。（芳即正「人物叢書新装版『島津重豪』」昭和六十三（一九八八）年吉川弘文館）

六　天璋院（篤姫）像

平成二十（二〇〇八）年は宮尾登美子の長編小説「天璋院篤姫」を原作としたNHK大河ドラマ「篤姫」が放映され、篤姫ブームの年となった。

放送にあわせ設置された「篤姫館」には県内外から六十六万人余りの入館者があり、「篤姫館」実行委員会ではその収益を活用し、天璋院（篤姫）像を建立することとなった。その候補地に黎明館敷地が選ばれ、平成二十二（二〇一〇）年十二月十九日黎明館前庭で、知事、鹿児島市長、徳川・島津・近衛家当主等が出席して除幕式が行われた。銅像制作者は文化勲章受章者の中村晋也氏である。

前庭の石畳に約6×6mの白御影石が敷かれ、その上に台座が二段におかれている。下の台座は約3×2.4×0.6m、上の黒御影石の台座は約1.2×1×0.7m、この上に椅子に腰掛けた姿の高さ約1.8mの像がおかれている。

明治時代前期、断髪の天璋院肖像写真が残っているが、像はこれを基に作成された。

像の後方には屏風を模した高さ約2.3mの石がおかれており、その中央には天璋院（篤姫）が、戊辰戦争の際官軍隊長に宛てた嘆願書（註一）の一節、「私事一命ニかけ是非〳〵御頼申候事ニ候」の文字が刻まれている。

屏風の裏には三枚のプレートが張られ、日本語、英語、ハングル、中国語（繁体字、簡体字）で書かれた碑文が記されている。

「天璋院（篤姫）像」

○　碑文（註　日本語以外は省略した。）

碑　　文

「私事一命ニかけ是非〳〵御頼申候事ニ候」

天璋院（篤姫）は、天保六年（一八三五年）今和泉島津家の姫として現在の鹿児島市に生まれた。嘉永六年（一八五三年）、島津家第二十八代当主島津斉彬の養女となり鶴丸城に入り、安政三年（一八五六年）、近衛家の養女として、第十三代将軍徳川家定の御台所となる。わずか二年足らずで家定が没した後は、落飾して天璋院と号した。

その後、世の流れは討幕へと大きく傾いた。討幕軍の先頭に立っているのは実家の薩摩藩であり、その参謀は西郷隆盛であった。天璋院は、苦しい立場の中、最後まで江戸城に留まり、徳川家の存続に力を尽くした。

冒頭のことばは、天璋院が、戊辰戦争の際、徳川家の存続を願い、官軍隊長に宛てた嘆願書の一節である。

幕末から明治にかけての激動の時代に、自分の信じる道を生き抜いた天璋院は、明治十六年（一八八三年）に没するまで、再び故郷鹿児島の地を踏むことはなかった。

平成二十年のＮＨＫ大河ドラマ「篤姫」放送にあわせて設置した「篤姫館」は県内外から六十六万人余りの入館者をみた。この像は、その収益を基に、天璋院の功績を顕彰するため建立するものである。

平成二十二年十二月十九日

「篤姫館」実行委員会
制作　中村　晋也

註一　官軍隊長に宛てた天璋院書状（嘆願書）について

黎明館では、平成二十二（二〇一〇）年十二月十九日の天璋院（篤姫）像の建立にあわせ、一階常設展示場入口付近に篤姫関係資料を特別陳列している。天璋院系図や薩陽武鑑などの展示のほか、官軍隊長宛の天璋院書状釈文とその口語訳を掲げた。展示された書状釈文をここに再掲する。

ゴシック体が天璋院（篤姫）像の屏風に刻まれた部分である。

天璋院書状　官軍隊長宛（釈文）

此度無據事ニ付取敢ス御頼申へき事別儀ニ
候ハす、慶喜一條にて候、今更申も詮なき事なか
ら、一體一昨年大坂に於而　昭徳院世を辭セら
れ候砌り、慶喜上京中と申、跡相續と相成候儀、誠
に止事を得さる次第も候半かと、是迫默止居候
へ共、當人之容子から、兼々私之心底に應し不申、
旁相續之上ハ、以後國家之形勢、臣下之思ハく等
も如何候哉と、朝夕心配致居候得共、女之事に候
へは詮方無、只々神佛を拝し無事を祈候のミに
候、去なから世嗣となりて家之障りニ成候程之
事ハ、よも仕出すましと存居候處、案外之事ニ而、
此頃いか様成る不忠致候哉、更〳〵始末からハ承
り不申候得共、此度

御所より　朝敵之御沙汰を蒙り候由、承知致し
驚入、實〳〵容易ならさる儀と
天帝に對し私共深く恐入、當惑心痛の折柄、手を
かへ品をかへ右之事譯相尋候得共、當人ハ勿論
只々恐入候とのミに而、其外何方よりも申聞候
もの無之、就而ハよく〳〵の大事と猶更心勞致
居候、本來之志、事之虚實ハ如何候哉、いつれに致
せ、此程追々風聞其外承り込候趣にてハ、何共申
へき様無之、殊ニ諸人之上ニ立、國家を治むる武
將之身として心得違ひ、以之外の心底返ス〳〵
も恐入、落涙悲歎致し候共及ハぬ事と、遺恨かき
り無存候、就而ハ當人ハ扨置、徳川家存亡之程も
計りがたくと
御先祖様に對し此上もなき大不孝、其上ならす
夢更存も申さる一門方始、家來之末々迄、無實之
災難塗炭之辛苦を負セ候儀、忍ひかたきハ申迄
も無候、左候とて女之私共
天朝に御直ニ御詫申上候も行届間敷と既に日
光御門主江ひたすら歎き入候處、御同人も御同
意御心配之折柄、取敢す御詫として、過日東海道
江向ケ御出立候へ共、迚も其御方〳〵之御取扱
ならてハ相叶ひ申間敷と存候故、**私事一命ニか**
け是非〳〵御頼申候事ニ候、畢竟私事當家江嫁
し付られ候も、御父上之深き御思慮まし〳〵ての
御事ニ而恐なから
神祖之御骨折御恩澤を厚く思召され、天下泰平
徳川家安全を御計ひ、万々一之儀御座無様御力
を添させられし御含ミニ而、右等之御趣意ハ御
承知も有之候通り申迄も無儀ニ付、かゝる當家
之難儀を何とか御支へ様も有之間敷哉、尤　朝
敵なとゝ申由ニ而ハ
天帝の御逆鱗申上候迄も無之其御方ニ而も御
取扱之程無々御當惑之次第と察し入候まゝ、當
人ハいか様天罰被仰付候てもは是非ニ及ハさる
事ニ而候へハ、元より御歎き可申様も御座無事
ニ付、是ハ可然御心得、只々徳川之儀ハ大切の家
柄、此段幾重にも御組分、何れにも徳川家安堵致
候様
御所江御執成之程折入而御頼申候、私事徳川家
江嫁し付候上ハ、當家之土となり候は勿論、殊ニ
温恭院ましまさす候へハ、猶更同人之爲當家安
全を祈候外御座無、存命中當家万々一之事出來
候へハ、地下ニおゐ而何之面目も無之と、日夜寐
食も安んせす、悲歎致居候心中の程御察し下さ
れ、兎に角此度之事御取扱下され候ハゝ、　私共
一命相すくひ被下候よりも猶重く有難き事、此
上の悦御座無候、當時之形勢と申、人情と申、外諸
侯ニおひて御頼程之きりやう之者も御座無、又

可盡力も無之候得ハ、御迷惑なから其御方のミ
相便り候外工夫も御座無候ニ付、呉〳〵厚く御憐
ミ被下、此艱難御救ひ被下候ハヽ、
其御先祖様御父様之御孝道ハ申ニ及ハす、徳川
家江之義も相立、御武徳御仁心此上なき儀と存
られ候、是非共〳〵此御頼御聞濟下され、徳川家
無事ニ相續相叶候様御取扱之程、偏ニ〳〵御頼
申候、修理大夫殿大隅守殿江御たのミ申入候筈
なから、火急之場合遠路間ニ合不申候まゝ、
其御方へ御頼申入候まゝ、宜しく御組取御承知
被下候様ニ、何分ニも厚く御頼申入候、急き大亂
筆宜敷組とり被下候

めて度

かしく

隊長江
人々

天　璋　院

おわりに

「続・黎明館敷地内の記念碑等について」という題で稿を起こそうと思い立ったのは、平成二十二（二〇一〇）年十二月黎明館敷地内に天璋院（篤姫）像が建立されたことがきっかけであった。

当初は天璋院（篤姫）像建立について何かに記録しておこうと考えていた。

しかし黎明館敷地内には天璋院像のほかにも記念碑等が点在している。その大半については楠田靖夫氏の「黎明館敷地内の記念碑等について」という報告に記載されているが、これは昭和六十二（一九八七）年の発行である。それ以降に建立された記念碑等については、これまで個別に「黎明館調査研究報告」の中で取り上げられているものもあるけれど、全体を一覧できるものがない。

そこで楠田氏の報告以降設置された天璋院像などの記念碑等を紹介する続編を作成することに方針を変更した。楠田氏の報告をはじめすでに黎明館調査研究報告に取り上げられているものや、詳しい由来板が設置されているものは、それを転載するにとどめたが、七高関係記念碑は七高ＯＢの方々が同窓会会報上等で色々と考察されているところなので、それらについては少し詳しく取り上げた。

この一文が調査研究に該当するのかどうかは分からないが、楠田氏の報告とあわせてみることで黎明館敷地内を散策する手がかりの一つにでもなれば幸いである。

訂正

続編を作るにあたり、楠田靖夫「黎明館敷地内の記念碑等について―『黎明館敷地の歴史』の断片―」（『黎明館調査研究報告第一集』昭和六十二（一九八七）年三月）を参照していたところ、数箇所誤りに気付いたのでここで訂正しておく。

（本館　副館長）

「黎明館調査研究報告」第一集「黎明館敷地内の記念碑等について―『黎明館敷地の歴史』の断片―」

訂正表

旧	新	頁・行
巳	已	63・下段9行目 9文字目
掿	抵	63・下段13行目 13文字目
治	洽	64・上段10行目 12文字目
一七七二	一七七三	66・上段4行目
西河口	西川口	72・上段20行目